

＜書 評＞

ジーニー・ヘロン 編

近藤喜代太郎

監訳

杉下 守弘

左きき学：その脳と心のメカニズム

永江和久（九州労災病院）

利手の存在は誰もが知っており、左利きは昔から知られた状態ではあるが、紀元前の時代から興味を持たれ、今日なお多くの未解決の課題を有する古くて新しい問題である。本書は、左利きが何故おこるか、左利き者はどのような問題を抱えているのか、左利き者はどのような特技を持っているのかなどの問題について多くの学説や研究成果を紹介している。

監訳者、近藤喜代太郎博士は自身自身が左利きで、深い関心と同感をこめて本書の翻訳に当たったと述べ、杉下守弘博士は心理学を専攻し神経学に通暁した、斯界の権威者であ

る。他の翻訳者はいずれも臨床神経学、精神医学、心理学を専攻する新進気鋭の研究者である。これらが本書の日本語訳を的確なものにしたと言っても過言ではないであろう。

全体は16章に分かれている。先ず、右腕は血流の圧が高く、より強力であるから利手となったなど初期の学説、事実、空想、左利きの神経解剖学的非対称など、誰もが興味を覚える話題が豊富で時がたつのを忘れてしまう。次に、脳機能の非対称性の胎生学的成り立ち、双生児の左利き、左利きの遺伝、非右利き者大脳機構の個体発生モデルなど、左利きの発生に関する諸問題へと論及され

ている。

つぎに、左利きにおける一貫した特性が述べられているが、たとえば、左利き者における失語症の頻度や、大脳半球の活性化を脳波の波の活動を指標として検討し、左利き者は大脳半球への局在の程度が弱く、時として逆方向に局在すると結論した研究の紹介などなどがある。

さらに論題は左利き者の能力に及び、利手と音の高さの記憶、レオナルド・ダ・ヴィンチやミケランジェロは左利きであったが、芸術家には左利きが多いが、盲人の利手、点字を速く読むのはどちらの手かなど興味ある疑問に答え、最後、第16章は触覚学習、利手および読字障害の問題を論じている。

有用で楽しめる良書であるが、初心者には難解な箇所はどしどし飛ばして読み、再度よみ返すことをおすすめしたい。引用文献 902 篇。

（A 5，頁414，1983，¥2,800，西村書店刊）